

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

中国広西壮（チワン）族とベトナム・ヌン族の民族
間関係：文化の比較と交流を中心として

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 塚田, 誠之 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001561

中国広西壮(チワン)族とベトナム・ヌン族の民族間関係 —文化の比較と交流を中心として

塚田 誠之
国立民族学博物館

はじめに

1 壮族とヌン族の文化の異同

1.1 来歴

1.2 衣食住

1.3 婚姻習俗

1.3.1 通婚圏

1.3.2 婚礼までの過程

1.4 生育習俗

1.5 年中行事その他

2 壮族とヌン族の交流

2.1 交易活動

2.2 その他の交流

おわりに

はじめに

同系の民族が中国と東南アジア大陸部諸国とに分かれて居住する場合は少なくない。壮(チワン)族とヌン族もその一例として挙げられる。壮族は中国の広西壮族自治区を中心に居住し、約1680万人(2000年)と、中国の少数民族のうち最大の人口を有する。言語はタイ系に属する(南北二大方言がある)。ヌン族は人口約85万6400人(1999年)でベトナム少数民族のうち6番目の人口を持つ。ランソン・カオバン・クアンニン・ハザン・トゥエンクワン・ラオカイなどの省に居住するが、ランソン省に最も多いとされる(伊藤2003:16)。ヌン族は中国広西から移住してきた歴史を持つ。本稿は壮族とヌン族との民族間関係について、両者の文化の異同、および諸般の交流について主に実地調査¹の資料に基づいて検討する。まず文化について、衣食住、婚姻習俗、生育習俗、年中行事の諸側面から比較検討を行う。次に、壮族とヌン族との国境を越えた諸方面の交流を瞥見する。とくに中国とベトナムとの国境貿易が盛況を呈し注目されているので、交易への関わりに重点を置いて検討を行う。なお、とくにベトナムに関しては一部の地域での短期間の調査ゆえ、材料は断片的で不完全なものである。しかし、たとえ全面的なものでなくとも中間的整理を試みることは、壮族・ヌン族の文化の成り立ちを考える上で、また中国・ベトナムの国境の果たした作用を考える上でも意味のある作業と考える²。

1 壮族とヌン族の文化の異同

1.1 来歴

ベトナムのヌン族は広西から移住してきた。カオバン省クアンホア県フクセン社F村の老人（調査時81歳）によると、当地のヌン族は「ヌンアン」支系で、広西の隆安（県）から移住して第9代だという。ランソン省チャンディン県の街区の老人（61歳）によると該県には「ヌンチャオ」「ヌンファンズイン」がいるが、氏は「ヌンチャオ」に属する。広西から移住して4代目だという。カオバン省ハークワン県ナーサー社K村の「ヌンファンズイン」の老人（76歳）によると、5、6代前に中国から来たという。范宏貴によるとヌン族が移住して2,300年の歴史を持つこと、早いものは7、8代（300年）経っており、遅いものは4、5代（200年）経っているという（范1989：173）。移住時期に幅があることは移住が波状的に行われたことを示している。なお范によると、ヌン族の支系名は中国での出身地名をとったものであるという。たとえば「ヌンチャオ」は龍州、「ヌンファンズイン」は万承州（現大新県）、「ヌンイン」は龍英州（現天等県）、「ヌンロイ」は下雷州（現大新県）、「ヌンクイジン」は帰順州（現靖西県）、「ヌントゥンシン」は崇善州（現崇左県）である（范1989：163）。これらの地名を見るとヌン族の故地は広西のなかでもベトナムに近い西南部が多く、従って移住はさほど遠距離ではない。

他方、中国側の壮族を見ると、靖西県安德鎮大楽村黄国J（1996年当時79歳）によると、万承州から移住して9代経つという。趙榮X（同68歳）によると趙姓も同じである。大楽村付近の新村では「ヌンアン」方言が話されるが、黄金T（81歳）は、隆安県から来て2代目だという。壮族も移住を行ったのであり、しかもヌン族と同じ万承州や隆安県から移住したものがいることが注目される³。

1.2 衣食住

衣。 広西側では「民族衣装」を着用する機会がベトナムの場合よりも減少している。ベトナムの場合、クアンホア県フクセン社では女性は日常的に藍色・黒色の上着・ズボンの衣装を着用していた（写真1）。ただし、中年以上の女性に限られる。

食。 行事用の食品として搗きモチ・オコワなどモチ米食品が特徴的で、中国・ベトナムともに維持されている。なお、嗜好品としてキンマがベトナム（フクセン社）で用いられている。キンマは清代には結納品として用いられる（道光『白山司志』9、風俗、冠婚「司冊」）など一般的だったが、広西では現在はほとんど見られなくなっている。この外、ベトナム側では調味料に魚醬ニョクナムを使う場合が多いが、中国側には見られない。

住。 高床住居「干欄」が特徴的だが、中国・ベトナムともに減少している。中国では靖西県など自治区西部・北部の一部の地域に残されている。ベトナムでもチャンディン県には見られなくなっていたし、ハークワン県でも交通至便な平地では廃れつつある。フ

クセン社では木材を用いたふり形の高床住居が残されている。高床住居は、二層が人間の居住空間に、一層は家畜を飼養し農具を置く空間である。フクセン社では、祖先の祭壇と神祇祭祀の祭壇が分かれている（写真2）。ハークワン県では両者はもとは分かれていたのが後に1つに統合されたという言説があるので、ベトナムへの移住後のよりふり形が推測される。広西側では祭壇は一体化されたもの（写真3）しか見ていないので元来の形式は即断できない。が、筆者はもっかのところヌン族がベトナムに移住した後に生じた現象と考えている。調理の場として、フクセン社やハークワン県の一部の地域ではイロリが使用されているが、広西やチャンディン県・ハークワン県の多くの地域ではカマド使用へと変化している。さらに、テーブルとイスの使用について、広西ではテーブルとイスが普及しているが、フクセン社では床上にゴザを敷いて座る形態がテーブル・イスと並行して残されている。これらの点について明末の『徐霞客遊記』「粵西遊日記三」に、土官の統治する土州と直轄地との習俗の相違についてふれられており、直轄地では瓦葺き屋根の平屋でテーブルやイスがあること、カマドを使って調理をすること、土州では高床住居、イロリで調理することが記されている。これにより、高床住居に住まいイロリで調理しテーブルやイスを使用しないのがよりふり形態であることが明らかである。とともに、土官のもとにふり形態が残されたがゆえに広西の西南部（多くはもと土官地域）から移住したヌン族のもとでその形態が維持されたであろうことが推測される⁴。

1.3 婚姻習俗

1.3.1 通婚圏

通婚圏についてフクセン社と靖西県大楽村とを比較してみよう。筆者がフクセン社で調査を行った際に「出生登記簿」を閲覧する機会を得た。これには、2000年1月1日から同年9月11日までに登記された子供の姓名、父母の姓名と出身村が80例記入されていた。それによって66組の夫婦の出身村が把握できた（残る14例は1組の夫婦に複数の子供がいる場合である）。66例中、49例（74%）が同一自然村の婚姻で、残る17例が近隣村の婚姻であった。大楽村の場合、すでに前稿で述べた（塚田2003：605-643）が、158例中90例（57%）が同一自然村の出身で、59例（37%）が隣接する村の出身者である。村落の規模は異なるが、ともに通婚圏が非常に狭いことが明らかである⁵。

1.3.2 婚礼までの過程

婚礼までの過程について広西の漢族のもとでは中華人民共和国成立以前、「六礼」と呼ばれる次の方式がとられた。(イ)「訂婚」（結婚の交渉）。男性側の父母が媒人（仲人）を立てて女性側に縁談を申し入れる。(ロ)「年庚」（八字。当事者の相性占い）を「算命

先生」に推算してもらおう。これが合えば媒人が女性側に行き婚約の期日を決める。(ハ) 正式な婚約。(ニ) 婚礼の日取りの決定。男性側は結納を贈る。(ホ) 嫁入り。「伴娘」が嫁に付き添う。夫家で「拜天地」「拜祖先」「交拜」(拜堂) 儀礼をする。(ヘ) 新郎新婦が婚礼の三日後に結婚披露のため妻方を訪問する(「回門」)(楊 1934: 93-99)。壮族も漢族の影響を受け、明末から民国期に多くの地域でこの方式が用いられた。ただし結納にキンマの葉で包んだピンロウジやモチ米食品を用いる地域があったこと、新婦が婚礼後実家へ帰り初生児を身ごもるまで実家に居住する「不落夫家」習俗が行われたので(ヘ)の「回門」は新婦が実家へ帰り夫と別居することを意味していた点が異なっていた。また、嫁入りの際に、道光『慶遠府志』三、地理下、風俗「婚姻」に「男家は幼女2人ならびに土巫をもって女家に往き嫁を先導する」とあるように「土巫」すなわち宗教的職能者が嫁入り行列の先導をした(塚田 1999: 143-174)。

上記の過程について、調査資料によると、(イ)についてフクセン社では仲人を立てた(男女とも可)。(ロ)について「八字」を道士⁶に見てもらった。ハークワン県ナーサー社でもそうだった。道士は婚礼の日取りをも選んだ(ナーサー社では道士が嫁入りの時間も決めた)。この点、靖西県大楽村でも、道士が男女双方の八字を見て婚礼の期日を決めた。(ホ)の婚礼について、大楽村では、1953年以前は婚礼のときに夫側の道士が嫁入り行列を先導した。新婦が夫家に入ってから道士が祖先の祭壇で拜んだ。フクセン社では道士の随行は現在も行われている。筆者は2001年3月5日にフクセン社L村で嫁入りを観察する機会を得た。まず朝9時に新郎側から道士と20歳の未婚女性(新郎の姪)が新婦を迎えに行った。次いで午前11時過ぎに嫁入り行列が新郎の家の前に到着した。一行は新婦のほか、迎えに行った道士と夫方の女性1人、新婦と同年の少女「伴娘」2人、さらに新婦の「幹爹」(擬制的親族。この場合新婦の叔父)と糯米などをつめた籠を持つ女性、布団、箆筒など持参財を積んだ馬車1台から成っていた。一行が到着するや道士が新郎の家(高床住居)の一層の戸口のところで供物を供えて念経を始めた(写真4)。これは新婦が家族の一員になったことを祖先に報告するものである。その後新婦らが家に入り、洞房に入った(写真5)。道士と新婦の「幹爹」は家内の祭壇で祖先を拜んだ(新婦は祖先を拜まない)。なお、チャンディン県では道士は婚礼に同行せず、嫁入り前に女家の祭壇で祖先に報告する。その報告が終わってから出嫁が可能であった。以上より壮族・ヌン族ともに道士が婚姻過程において重要な役割を果たしてきたことが指摘される。

なお、先のL村では、新婦は洞房で昼食をとってから、村内の井戸へ行き水を汲み夫家の水がめに運んだ。その際に夫方の少女が先導し小銭を井戸に投げ入れた。この習俗は広西ではよく見られる(たとえば『壮族百科辞典』編纂委員会編 1993: 371)。新婦は水汲みをした後、伴娘とともに実家へ帰った⁷。ここから「不落夫家」の期間に入る。かつて中華人民共和国成立前は壮族の新婦は婚礼後約3年間、夫と別居をしたのだが、現在は形だけのものになっている。たとえば大楽村では、婚礼の日に新婦は一旦実家へ帰

るが向こう1ヶ月、毎日のように夫家に来て、1ヶ月後には夫家に定居するという。ベトナムでもチャンディン県チーラン社では、1940年以前にはあったのだが、今は消滅したという。L村でも夫家との往来が以前より自由になっている。次第に変化しつつあるが壮族・ヌン族とも不落夫家の習俗をもつ点で共通性がある。

なお、フクセン社での婚礼の際に玄関・屋内の部屋の入り口・祖先の祭壇に貼られた対聯は、婚礼の前日に道士が書いたという。チャンディン県街区の場合、道士に限らず村老も漢字を書くことができるというが、多くの人が漢字を書くことができる中国側と比較すると大きな違いがある。漢字の読みはフクセン社ではヌン語でなされていたようだが、広西では普通語で読まれることが多い（道士による念経は壮語で読まれる場合もある）。このことは、この数十年間における共通語普及教育の進展を示すものでもある⁸が、ともあれ中国から移住した後、漢字を書き漢語を読む人口がごく一握りの宗教的職能者や村老などに限られるようになった点で、壮族とヌン族との間には相違が見られる。

1.4 生育習俗

子供の出生に際して出生祝いが行なわれる。靖西県大楽村では「三朝」・「満月」を行う。前者は出生の3日後、後者は1ヶ月後だが、期日はさほど厳密ではない。とくに満月の祝い（日取りは道士が決める）が盛大で、趙栄X氏によると、その子の満月の祝いに妻方の父母兄弟親戚4、50人もが、豚肉・鶏・米・子供の背負い帯や帽子を持参して来た。テーブル10卓ほどを囲んで盛大な宴会を開いたが、妻方から妻の父や兄弟ら男性が来るのは漢族や壮族の中でも漢化の度合いの強いものには見られない現象である。加えて、多くの場合、男女を問わず第一子のときのみ盛大な宴会が開かれる（経済的に豊かな場合、あるいは第一子が女子で第二子が男子の場合は第二子以下にも行うことがある）。筆者は以前に、それが子の父母の事実上の婚姻の成立を意味することを指摘した（塚田1999：143-174）。それゆえに妻方の男性が来る必要があるのである。

チャンディン県街区やハークワン県ナーサー社でも子供の出生後満月を行い、妻の父は必ず来る。満月の祝いは初生児に限られる。フクセン社では満月ではなく三朝と満4ヶ月の祝いを行うが、妻方の父や兄弟が必ず来るのでその意味は満月と同じである。この点に関しては壮族とヌン族とは共通している。

満月にはさらに道士が祭壇で祖先に子の出生を報告するとともに子供の守護神「花母」（メイワー、ワーワン、「花王聖母」、「花王」）を安置し拜む。それは「花母」が子供を授けてくれたことに感謝し報告するのであるといわれる。したがって「花母」への報告はすべての子に行われる。「花母」は神祇名を紅紙に墨書する場合、祭壇に香炉を置いてそれで示す場合、別に小祭壇をつくる場合がある。「花王聖母」の神祇自体は漢族の娘娘神に由来すると考えられるが、壮族に広く信仰されてきた。万曆『広西通志』三三、諸夷種類「獮」に、「有娠乃密告其夫作欄、又数年、延師巫結花楼、祀聖母、親族少男少婦数

百千人、歌歎号叫劇戲三四日夜。」とある。チャンディン県街区でも、満月に道士が祖先に子供の出生を報告する。その際、「聖母花王之位」の文字を紙に書いて香炉の後方に置く。ハークワン県ナーサー社でも満月に花母儀礼をするが、この場合、道士ではなく別の宗教的職能者「プット」が行うという⁹。ともあれ、子供の出生後の花母儀礼と宗教的職能者の関与という点で壮族・ヌン族とも共通している¹⁰。

1.5 年中行事その他

フクセン社の年中行事は次の如くである（期日は旧暦）。元旦、正月1日。1月30日、モチを作る。3月3日、墓参。5月5日、牛の誕生日。牛を休ませる。モチ・オコワをつくる。6月6日、水請い祭り「ゲン・タン・ナー」。「清明祠」で神祭り。田植終了後に道士が期日を選んで村民（每家代表1人が参加）でプター頭を食べる。清明祠は、村民の生命を管理し村の土公（土地）廟を管理する。7月半（14・15日）、祖先祭祀。8月15日、月祭り。旧暦7月末・8月初、嘗新節（新嘗祭）。これらの外、チャンディン県街区では9月9日の祭り（ブタを殺して天地を祭る）、11月冬至節を行う。また5月5日は行わない。広西では、牛の誕生日を「牛魂節」といい、4月8日、5月5日、6月6日に行う地域に大別される（うち4月8日が多い）。また5月5日は漢族の影響により端午節を受容しチマキを作る。このほか2月2日、8月2日に農作物の生長・豊作を予祝する社神祭が行われる（塚田1992：169-251）。広西には「清明祠」はないが、田植終了後において土地神を祭り作物の順調な成長を祈願する行事が6月に行われる。糯米食品を行事食に用いることも同じである。3月3日の墓参は、広西では靖西県安德鎮など西部の壮族地域に残されているが、漢族の影響を受けて清明節に行うようになった地域が少ない。その点からするとヌン族にふるい形が残されている。壮族の場合、墓参の期日や5月端午節に漢族の影響がより濃厚であると言えよう。

なお、クワンホア県街区で旧暦2月2日・3日に「廟会」が行われる。それに伴って行われる行事として「搶花炮」（鉄輪を火薬で打ち上げて奪い合う行事）、「抛繡球」、龍舞、闘牛などがあるという。搶花炮はもと広西東部の広東人住民の習俗だったのが壮族に伝わり、現在は「壮族伝統の」行事として靖西県などで行われている（塚田2000：281-286、同2001：95-97）。抛繡球は、もとは男女の間で刺繍の施された球を投げて配偶者を探すのに用いられたのが、近年は体育競技化している（塚田2000：280、同2001：94-95）。これらは本来のやり方が変化しても壮族の行事として認識されている。ヌン族にもそれらがある。

ここで長寿祝賀儀礼についてふれたい。フクセン社では61歳になると「寿」（トゥー）といい「寿」字を染めた紅色の布が子供たちから贈られる。73歳は「康」（ハーン）で黄色の布が、85歳は「寧」（ニーン）で黒色の布が贈られる（写真6）。ハークワン県ナーサー社にも同様の習俗があり寿・康・寧のほか49歳の「福」（紅色の布）があった。布

のほか子ブタの丸焼き・鶏・アヒル・寿等の文字を描いたモチが贈られ、道士が念経する。この長寿祝いは広西でもベトナムとの国境地域の一部にしか見られない。靖西県大楽村や雲南富寧県帰朝鎮にこの習俗があり、道士が祭壇で祖先に報告し、ブタ・ニワトリを殺して親戚にふるまう。しかし、中国側では、この日に布を贈る地域とそうでない地域とがみられ、ベトナムの場合とは異なっている。

2 壮族とヌン族の交流

2.1 交易活動

まず中国側で「辺境貿易」と呼ばれる国境貿易について見てゆこう。農立夫によると1970年代後期に両国間の関係が悪化し戦争となったが、1983年に民間での交易が回復した。1983年9月から中国側に9個所の「草皮街」（民間の簡易市場）が開かれた。1988年には、ベトナムの人々が国境を越えて親戚・友人を訪問したり、生活・生産資料を交換することが許可された。1989年にはベトナム政府が辺境小額貿易を許可した。そして1991年11月に中越両国関係が正常化し、辺境「口岸」それぞれ21個所を開放することが決定された。1996年には広西側がさらに25個所の「互市貿易点」を開放した（農2000：46-51）。

この間の交易の実態について農によると、1983年から1988年までは辺民が交易品を肩に担ぎ手に掲げる形態で、貿易品の数量・品種は少なかった。ベトナム辺民が鶏・アヒル・犬・猫・獣皮などを持って来て、中国の布地・懐中電灯・薬品・靴・酒などと交換した。1989年から1991年にかけて、新たな建設と整備を経て一定の規模・設備を持つ貿易点が作られた（その一例が憑祥市の浦寨）。また中国側は広西内外の商人が、ベトナム側はクアンニン・ランソン・カオバン省等の商人が交易に携わるようになった。また貿易額の増加にともない貿易品が多様化した。1993年以降は日用消費品から生産資料・電気機具・トラクターや自動車など幅広い内容へ発展した。貿易方式も以前の物々交換・現金交易から銀行が関与する形へ変化した（農2000：46-51）。

壮族やヌン族が国境貿易に関わった時期はおもに1991年以前で、憑祥など大規模な貿易点よりも比較的小さな地点が主体であった。次に調査で得た事例から人々の国境貿易との関わり、およびそれ以外の日常の交易活動について見てゆこう。

(イ) 憑祥市友誼郷隘口村（写真7）。252戸1032人（2002年）の住民の約三分の二が壮族、約三分の一が漢族。清末以来、国境貿易の拠点として栄えてきた。中越戦争終結後、1984年から交易拠点となったが、1993年に交易地が付近の南山に移され、また浦寨・弄懐の発展により衰退した。交易開始当初はベトナム辺民がトカゲ・センザンコウ・亀（「金銭亀」）・猿などの「山貨」食材を持参して来た。自ら交易をするほか、中国国内（浙江・

上海・広東・南寧)の商人の仲介をもした。全収入の半分もが国境貿易の利益で、「万元戸」が「8, 90戸」も出たという。1985年から4年間は、中国国内の商人に倉庫を提供して利益を挙げた。今は農業・果樹栽培に従事し、また浦寨で貨物運搬の賃金労働に従事している。

(ロ) 憑祥市友誼鎮卡鳳村 M 屯。隘口村から小高い山地へ入ったところにある。友誼関やベトナムの山々を遠望することができる。34戸183人(2002年)。住民は全て壮族。1987～88年に交易が開始された。憑祥市・隘口村の「老板」(経営者)とベトナム側とを仲介し交易の場所を提供したほか、その際にベトナムへ行って親戚に話をつけたという。ベトナム側から金銭亀・干しいか・八角・銅板・ニッケル板を持ってきた。中国側からは布地・ゴム長靴・魔法瓶・懐中電灯・医薬品・ラジオ・自転車等の品が輸出された。当時は国境貿易が正式には未開放だったゆえ交易は夜に行われ、物々交換の方式だった。今は農業・果樹栽培のほか小規模な運送業に従事している。なお、筆者は当地でヌン族の女性が天秤棒を担いでブタ肉・豆腐・野菜といった普通の食材を売りに来たのを見た。こうした日常的な交易は今も行われている。

(ハ) 靖西県龍邦鎮界邦村 N 屯。国境に接する。50戸158人(2003年)。全て壮族。1983年に国境貿易が開始され、ベトナム側からセンザンコウ・細工用の亀甲・砂仁・鉄木・銅板・ニッケル板等を輸入し、中国側から布地を輸出した。当時は住民の8割もが交易に従事した。今は3割程度が交易に従事するが、近年、食用牛の輸出で成功している者もいる。

(ニ) 靖西県湖潤鎮新興村 X 街(写真8)。国境から2km。313戸1400人(2002年)。全て壮族。ただし X 街の住民の多くは広東や広西の他処から来て後に壮族になったもので「白話」(広東語)が共通語。定期市が開催される日にはベトナム側から鶏・アヒルを持って来る。中国側からは日用品のほか養豚用の子ブタを輸出する。現在も定期市の日にはベトナムから多くの人がある。当地はマンガンを産出し、一部が住民の請負になっているので、その利益も大きい。農業・果樹栽培なども行う。

(ホ) 龍州県水口郷羅回村 N 屯。国境から7km。20戸86人。全て壮族。定期市(農曆1日・4日・7日)の開催のときにベトナム人が鶏・アヒルを持って来る。中国からは家畜の飼料(化学肥料)、食用牛、中古トラクターを輸出。以前は交易が盛んだったが、今はベトナムに親戚がいる者が主に行うのみである。サトウキビ栽培・稲作・果実栽培が主体で、貿易は従であり、農閑期に国境貿易を行う形である。

(ヘ) ハークワン県ロンナム社。国境から8km。1475人。モン族125人以外はヌン族。

定期市(農曆4日・9日)の開催のときに「ヌン語を話す中国人」が万年筆・紙・サトウキビなどを持って来る。彼らはベトナムから鶏・漢方薬材(ウイキョウ)を仕入れて帰る。ここは多いときには200人も露天商が集まるが、国境から遠く不便な山道なので中国人は20人程度に過ぎない。ベトナム側はホアアン県、チャリン県からも車やオートバイを運転して来る。ヌン族・タイ族が主体である。県内には当地のほかバックポー社でも定期市が開かれ中国人が来る。こうした形態の交易はフランス統治期からあったという。人々は農業・交易を兼業する。

(ト) チャンディン県ダートン社N村。1987～1992年の間、付近の農民(ヌン族)が蛇・青蛙を持参して友誼関へ行った(1度に20～50kgも持って行った)。その後、商売を覚えて米の売買等を始める者が現れた。

以上の事例から要点を整理すると、国境貿易は1983年頃から行われ1988年頃がピークだったようだが、1991年の国交正常化以降も現在に至るまで行われている(ハ、ニ、ホ、ヘ)。貿易自体は清末、仏領期にすでに行われていた(イ、ヘ)。中華人民共和国成立前は地元民の貿易にはなんら制限がなかった(『憑祥市志』編纂委員会編1993:375-378)。次に規模は(イ)の最盛期を除いてはどれも小規模である。全体としては憑祥の浦寨など大規模な交易地点においては漢族やキン族が参入し、地元民の国境貿易に占める位置が低下する趨勢にあったが、小規模な交易地点では現在も交易は途絶えていない。形態は専門の交易点で行われるもののほか、定期市の際に行われる場合(ニ・ホ・ヘ)もある。さらに自ら交易を行うほかに外地の漢族の交易を仲介した(イ、ロ)。壮族はヌン族との間に親戚関係(ロ、ホ)などネットワークを持っていたし、言語が同じゆえコミュニケーションが容易だった。また伊藤正子によると、国境を越えるには通行証が必要だが、地元の少数民族の場合、臨時証明書の発行や身分証明書での通行など優遇されていた(伊藤2003:245-246)。こうした政治的措置も頻繁な往来を可能にした。

ここで注意したいのはまず定期市の存在である。それは交易のみならず人々が触れ合う場でもあった。男女の歌掛けは多く定期市において行われてきた。壮族とヌン族の親戚や友人が互いに往来する機会ともなったであろう¹¹。次に日常的な交易活動が行われていること(ロ)に注意したい。それはわずか数年間に集中した形の国境貿易(ト)と比べると定期市とともに人々の生活に密着している¹²。売買される商品もブタ肉・豆腐・野菜といった、ごくありふれたものである。しかも、壮族・ヌン族に限らず、国境線にかかわらず、同じものでもより廉価で便利なところで商品を購入する現象がみられる¹³。さらに上記の例は専門的に交易を行うのではなく、ほとんどの場合農業との兼業である。それは一種の多角経営であるとも言えよう。加えて交易の経験から人々に商品意識・価格意識が芽生えた¹⁴。広西の壮族が「農業に従事するのみで商業をせず」(黄1957:

56-58)、「経済的な主導権は漢族に掌握され」(民国『柳城県志』四、民事「民族」) 逼塞する状況は過去のものになったのである。(イ)で万元戸が続出したように、国境貿易は地元民に直接的に利益を齎した。地元民の収入の増加、生活水準の高まりが見られた。とともに商売を覚え(ト)、交易を通じて意識の変化が見られるようになったのである。

2.2 その他の交流

まず、通婚について、ベトナム側から中国へ女性が嫁いでくる例が国境貿易再開後かなりの勢いで増えている。憑祥市友誼鎮卡鳳村の場合、ベトナム側から嫁いでくる女性が村の既婚女性の7割にもなるという。その理由は両国の経済格差にあり、たとえば結納の金額は中国内地の嫁の場合は1万元、ベトナムからの嫁なら7,8000元といわれる(その場合、嫁は戸籍を取得できないが、生まれた子供は中国戸籍になる)。伊藤によると、友誼鎮では1985～1999年の間にベトナムから女性280人が嫁いで来ている。憑祥市全体では1107人にのぼる。逆に壮族女性がベトナムへ嫁ぐ場合は非常に少ないという(伊藤2003:249-250)。

次いで民間文化活動として、龍州県水口郷では、1950年代には歌墟が賑わい、ベトナム側からも来た。1970年代、文革の影響によって制約を受けたときはベトナム側の歌墟に行ったという。憑祥市の隘口村でも1980年代まで歌掛けの場「歌墟」が開催されベトナム側からも参加した。もっともテレビやCDの普及により伝統的な歌掛けが廃れつつあり、歌墟が行われる地域は少なくなっている。2003年3月4日、靖西県湖潤鎮新興村で旧暦2月2日の祭りとして鉄輪を打ち上げて奪い合う「搶花炮」行事が行われた。これに付随して演劇、バスケットボール大会、象棋大会、歌掛けが行われたが、歌掛けに参加したのは中年以上の人が多かった。この行事は定期市の開催日とも重なり、推定3000人ものヌン族の人々がベトナムから来た。

このほか、筆者は憑祥市卡鳳村で旧暦2月2日の土地公祭りを観察したが、その際に1kmほど離れたベトナム側からヌン族の道士が招聘されて儀礼を行う場面を見た。宗教的職能者道士は様々な場面で壮族の人々の生活に不可欠な存在だが、それは腕の優れた者なら壮族でもヌン族でもよかった。村の人々は、風水を見るときは同鎮南山街の道士、土地公祭りのときはヌン族の道士、葬儀は国内の他処の道士と、場面に応じて使い分けていた。このように、交易以外にも壮族とヌン族は様々なレベルの交流を続けている。壮族・ヌン族の生活圏は国境線を越えているのである¹⁵。

おわりに

本稿で検討したところを整理しよう。ヌン族は広西の壮族地域、とくに士官地域から移住した。壮族とヌン族の文化には諸般にわたって共通点が多く見られる。道士が婚姻・

生育をはじめ諸般にわたり重要な役割を占めてきた。第一子の出生後の満月の祝いに見えるように妻方の父の果たす作用が大きい。ただし壮族の側に漢化が進行し、国境で区切られ中国王朝や漢族の直接的な影響がヌン族に及ばなかったため、ヌン族のほうによりふるいと思われる習俗が残された。たとえば女性の衣服や高床住居のなかでの起居、5月端午節を行わないこと、3月3日の墓参などである。国境で区切られた結果、ヌン族に漢文に通じるものが少なくベトナム語の普及が進んだ。ヌン族が祖先祭祀台と神祇祭祀台を分けることは、移住先の地で独自に発展した結果であろうことが想像される。

国境で区切られたが、両者の間には（中越戦争期を除いて）往来が続けられてきた。主に1983年頃から1991年の両国の正常化までの時期において人々が国境貿易に関与した。今でも定期市をはじめ小規模ながら交易が行われている地域もある。国境貿易によって壮族は農業を主体とし貿易を従とする多角経営を開始し、商品意識・価格意識を身に付けた。

現在、農民が天秤棒を担いで商売に来たり、道士が壮族の土地公祭りに来るなど、人々がかなり自由に往来しているように見える。清末・民国期と比較すると貿易点は政府による管理がなされているし、民族政策が浸透して民族は「国民化」している。伊藤はドイモイ政策以降の国境貿易について、「民族の世界」がかつてのような自由な世界としてよみがえったのではなく、たまたま両国の政策の方向と一致していたために交易の増大という展開が可能になったこと、「民族の世界」はすでに「国家」の存在に制約されたものになったと指摘している（伊藤 2003：267-272）。清末・民国期と現在を比較すると、国家による制約、個々の国民に対する統治は確かに強まっている。国境貿易の進展の背景に政策が存したことも事実である。しかし、人々は日常の生活において必ずしも国家を意識せず、その生活圏は政治的な国境線を越えがちである。約1000kmに及ぶ広西・ベトナム国境地域において人々は、たとえば牛の放牧や行商、定期市や「歌墟」への参加、年中行事への参加、親戚・友人訪問など日常的に国境線を越えて交流をしてきたのである。このような人々の生活世界から国境のもつ意味について今後いっそう理解を深める必要があるであろう。

注

- 1 中国・ベトナム国境地域で筆者が行った調査の調査地と期間を記す。中国：広西靖西県安德鎮大業村（1996年4月、1998年9月、1999年4月、2003年3月）、同県龍邦鎮界邦村（2003年3月）、同県湖潤鎮新興村（1996年5月、1998年9月、2003年3月）、憑祥県友誼鎮卡鳳村（2002年3月）、龍州県金龍鎮（2002年3月）、同県水口郷（2003年10月）、雲南省文山州富寧県帰朝鎮（2002年8月）。ベトナム：カオバン省クアンホア（クアンユエン）県フクセン社（2001年3月）、ハークワン県ナーサー社・ロンナム社（2004年3月）。ランソン省チャンディン県（2004年3月）。
- 2 ベトナム北部、中国との国境地域に住むタイ系の民族という点ではタイ族も重要である。タ

イー族について伊藤正子はラ・ヴァン・ロの著作を引用しつつ、もとはヌン族と同じ民族だったのが、11世紀の農智高の反乱の後、タイー族の祖先「トー」と壮族・ヌン族の祖先の分化が始まったこと、「トー」がキン化しヌン族・壮族が漢化する道をたどったことを指摘している（伊藤 2003：15-16）。ヌン族と比べると壮族との距離の大きさが想定されるが、筆者の調査資料が甚だ不十分であるので、その検討は後日を期したい。

- 3 壮族の全体の来歴についてはここでは論じないが、筆者はそれは来歴の異なる多くの集団から成る複合的な民族集団であると考えている。なお、壮族にも支系がある。安德鎮付近の場合、方言によって分かれる。安德鎮とその周囲の村ではヤン（央）話が、少し離れた大楽村などではジョーン（壮）話が、新村など個別の村落でヌンアン（隆安）話が話されている。なお、広西では「山東白馬街」から宋代に従軍して来たという有名な伝承が一般的である。大楽村や龍州県の各地でも耳にしたが、ヌン族のもとではまだ確認し得ていない。
- 4 ただし土官の衙門は明代中期以降、一般の民家とは異なる威容を備えるようになった（万曆『太平府志』三、「各土州県」）。また官族（土官の一族）・都市近郊の豊かな層の住居も漢族式のものになったが、都市の貧民や農村の民の間では高床住居が残された（道光『白山司志』、風俗、居処「司冊」）。
- 5 なお、壮族・ヌン族ともに同姓婚が可能であるが、フクセン社の登記簿では17例、大楽村の場合は9例のみだった。また壮族の場合、婿入り婚が漢族に比べて多いが、大楽村では6例、フクセン社では1例のみだった。
- 6 范宏貴・顧有識によると、壮族の道教は漢族の道教と壮族のシャーマニズムとが融合したもので、武道（梅山道）と文道（茅山道）とがあり、前者の職能者を「師公」、後者は「道公」と呼ぶ。それぞれ従事する術術が分かれる（范・顧 1997：291-296）。また壮族の民間の宗教的職能者を「師公」とする文献もある（たとえば『中国各民族宗教与神話大詞典』編審委員会編 1990）が、本稿は民間道教の分析が主題ではなく、また国境地域で人々が「タオ」（ヌン族）、「ダウ、ブ・ダオ」（壮族）と呼んでいるのに基づき、ここでは仮に一般的な「道士」という言い方を用いる。
- 7 壮族のもとでは、かつては嫁に随行してきた伴娘たちと夫方の友人たちとが婚礼の日に夜を徹して対歌を行った。ハークワン県ナーサー社でも1958年に結婚したインフォーマントによると同様な場面が見られた。広西では現在でも双方の中年女性たちの間で儀礼的な対歌が行われる場合がある。
- 8 ベトナムのヌン族・タイー族に関するベトナム語教育について、伊藤はランソン省ヴァンラン県を中心に検討を行い、ヌン族がフランス統治期には漢字学習が主体だったが、1950年代以降のベトナム語識字運動と就学率の向上運動の進展によって、ベトナム語を習得し「ベトナム国民」意識を持つようになった経緯を述べている（伊藤 2003：174-194）。
- 9 専門的に病気の原因を占って調べる者で、線香・タマゴ・茶碗に盛った米などを道具とする。ベトナムのヌン族のほか広西でも龍州金龍鎮の壮族の支系「ブ・ダイ」のもとにいる。靖西県大楽村でも同様の職能者「巫婆」がいる。なお、花母には、子供が生まれない場合の子授けの効能もある。
- 10 なお、宗教的職能者として道公は婚礼・出生の儀礼に参加するほか、後述の長寿儀礼、さらに葬儀、病氣治療、家の新築祝いの際の期日選びと新築祝い「進新房」儀礼を行う。これらの作用は壮族・ヌン族ともほぼ共通している。
- 11 ただし国境を越えて定期市へ行くことが禁じられた時期もあった。中越戦争期後10年近く、タイー族・ヌン族が中国の定期市へ行くこと、壮族がベトナム側の定期市に来ることは公式には認められなかったという（伊藤 2003：247-249）。

- 12 周建新によると、龍州県武徳郷科甲村では定期市の際にベトナム側から日用品を購入しに来た。1997年以降、科甲村の人々が天秤棒を担いで毎日商売に出かけるようになったという（周 2002：195）。
- 13 こうした現象の具体例については稿を改めて論じたい。
- 14 農立夫によると隘口村では、住民の多くが預金をするようになった（農 2000：46-51）。「飢饉、婚葬その他意外の事が発生すれば、田地を抵当に入れ売り払い」没落してゆく状況（民国『柳城県志』四、民事「民族」）は過去のものになった。なお、袁少芬は隘口村を含む地域における農業を主体としつつ国境貿易が経済生活の一部になる生業、およびその経済的基盤の上に一般の農村のそれとは異なる文化が形成されることに注目し、そのような社会文化の類型を「農商文化」と名付けている。その特徴として上記の生業形態、商品意識・価格意識、不安定さ・脆弱さが挙げられている（袁 2004：98-150、袁 2006）。
- 15 中国側から壮族が避難してきたことも度々あった。たとえば1940年の日本軍の華南侵攻、1960年代後半の文革期（伊藤 2003：220-260）などである。避難民ではないが、清仏戦争に活躍した劉永福の黒旗軍に壮族が多く含まれていた（黄 1957：48-49）ことなど人の流動は史上に多く見られた。

文 献

范宏貴

1989 「我国壮族与越南岱族、侬族的古今關係」范宏貴・顧有識編『壮族論稿』南寧：広西人民出版社、160-175。

范宏貴・顧有識等

1997 『壮族歴史与文化』南寧：広西民族出版社。

黄現播

1957 『広西僮族簡史』南寧：広西人民出版社。

伊藤正子

2003 『エスニシティ〈創生〉と国民国家ベトナム 中越国境地域タイ族・ヌン族の近代』東京：三元社。

農立夫

2000 「中越国境貿易回顧及発展建議」『東南亜縦横』増刊、46-51。

『憑祥市志』編纂委員会編

1993 『憑祥市志』広州：中山大学出版社。

塚田誠之

1992 「チュワン族の年中行事に関する史的考察——成立過程を中心に」『国立民族学博物館研究報告』17 (2)：169-251。

1999 「壮族の婚姻習俗『不落夫家』に関する史的考察——一九四九年以前の広西を中心として——」『中国21』143-174。

2000 「広西西部靖西県における壮族の文化変化の一側面—経済・社会的変動のなかの民族文化—」『壮族文化史研究—明代以降を中心として—』東京：第一書房、273-292。

2001 「チワン族の『三月三歌節』にみられる文化変容とその背景」佐々木信彰編『現代中国の民族と経済』京都：世界思想社、89-106。

- 2003 「壮族の婚姻習俗『不落夫家』に関する一事例——一九四九年以前の広西西部靖西県安德鎮における」塚田誠之編『民族の移動と文化の動態——中国周縁地域の歴史と現在』東京：風響社，605-643。

楊煊

- 1934 「広西風俗概況」『広西省政府公報』1934年8～12期。

袁少芬

- (主編) 2004 『民族文化与經濟互動』北京：民族出版社。

- 2006 「中越辺境民族文化振興与經濟互動的考察」本論文集に収録。

『中国各民族宗教与神話大詞典』編審委員会編

- 1990 『中国各民族宗教与神話大詞典』北京：学苑出版社。

周建新

- 2002 『中越中老跨国民族及其族群關係研究』北京：民族出版社。

『壮族百科辞典』編纂委員会編

- 1993 『壮族百科辞典』南寧：広西人民出版社。

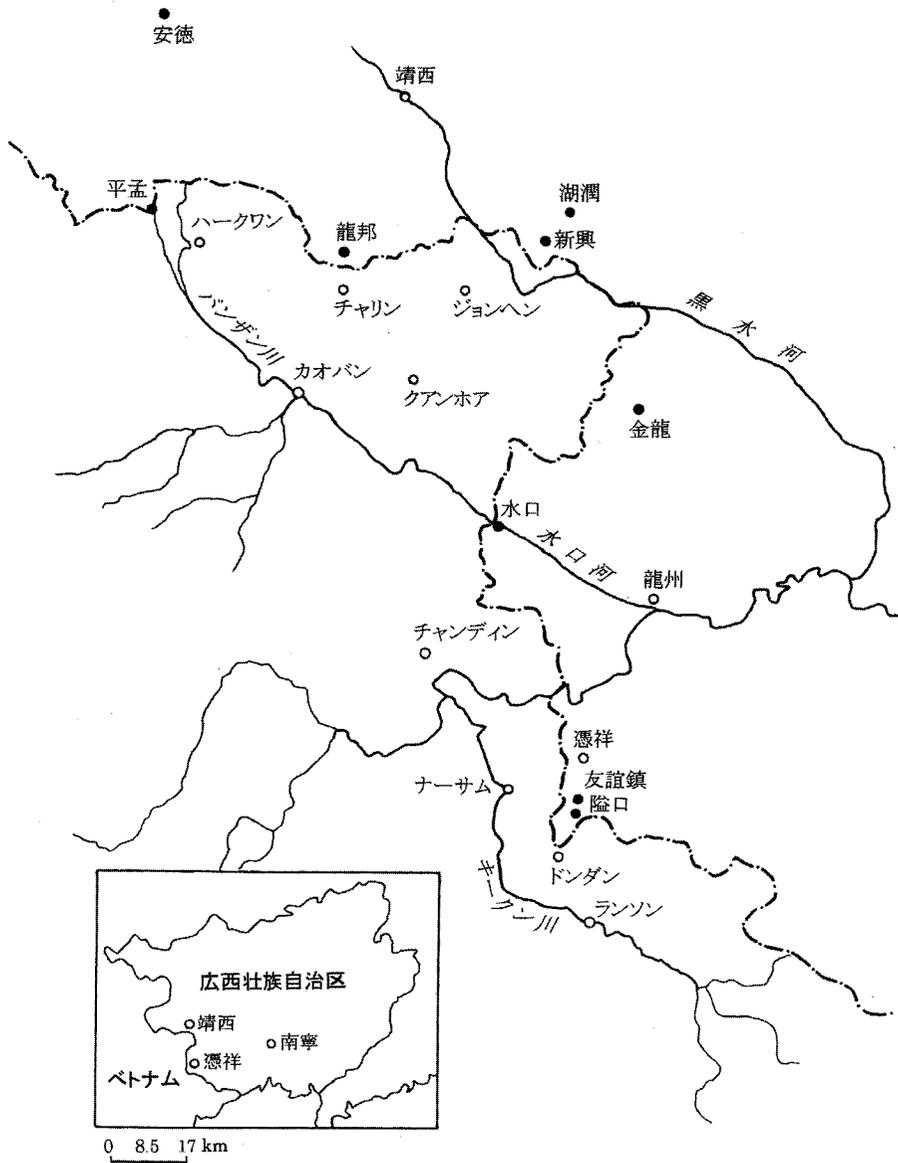




写真1 フクセン社の女性たち



写真2 神祇祭祀の祭壇（上）と祖先祭祀の祭壇（下）



写真3 広西靖西県安德鎮Z屯農建Y氏宅の祭壇



写真4 道士が新郎の家に来て念経するところ



写真5 洞房の新婦（中央）と伴娘たち



写真6 「康」字を染めた布



写真7 隘口村のメイン・ストリート



写真8 X街の定期市

